

意図の接続問題について

丸山望実 (Nozomi Maruyama)

九州大学

本発表の目的は現代行為論の抱える「接続問題(interface problem)」について、従来の立場を検討するとともに新たな問題解決のアプローチを考察することである。

接続問題は、行為の因果説において問題となる。因果説は行為とは意図によって引き起こされる身体動作であると考えられる。例えば、サッカーでの「シュートを打とう」という意図が実際の身体動作を引き起こし、それが「シュートを打つ」という行為となる。この意図は命題的な、文章に似た形式を持つとされてきた。というのもこの意図は、実践的推論の中で欲求や信念といった他の命題的態度と合理的な関係性を築かなければならないためである。

しかし近年、この命題的な意図と身体動作の関係という行為の理解は不十分であることが指摘されている。行為を達成するためには、その場の状況に応じたよりきめ細かなコントロールが必要なのである。ただシュートを打つ際にも、大振りに蹴るかゆっくり蹴るかといったコントロールや、私とボールの位置を踏まえた微調整などが必要となる。この高度に状況依存的なきめ細かな微調整は、意図のような命題的なレベルでとらえられるものではない。これらの点を特定しつつ行為を成立させる非命題的な表象は「運動表象(motor representation)」と呼ばれ、注目されている。

このように私たちの行為は意図と運動表象という二つの心的表象によって成立しているといえる。したがってこれら二つの要素が一つの結果、例えば「(まさにこのようにして)シュートを打つ」ことを特定したうえで行為を導かなければならない。しかし意図は「命題的な形式」を持つものに対して、運動表象は「非命題的な形式」を持つものであった。ここで問題となるのは、形式が異なる意図と運動表象がどのようにして、非偶然的に一つの結果に一致しているのかという点である。この意図と運動表象の接続関係がどのようにして達成されるのかが不明であるというのが、本発表で主題とする「接続問題」である。

これまで接続問題に対してはいくつかの解決策が提案されてきた。例えばバターフィルらは、意図には直示的な概念が含まれると主張する。この直示的な概念を経由することで、形式の異なる二つの表象を結びつけることができると主張した(Butterfill & Sinigaglia 2014)。これに対してバーンストンは、意図と運動表象の間にはこれまでの論者が想定してきたような決定的な関係がありえないと主張する(Burnston 2017)。というのも、命題的な形式を持つ意図は、例えば「犬」という語は様々な犬種の個体と対応しうるように、一定の範囲内の運動表象を特定することしかできないためである。そこでバーンストンは意図と運動表象の間に「バイアス関係」という弱い関係性を想定することで接続問題の解消を図る。しかしこのバイアス説にも、結局この弱い関係性の内に接続問題が生じるという批判があり、接続問題に対しては決定的な解決策が提示されていないというのが現状で

ある。

そこで本発表では接続問題に対する別の観点からのアプローチを考察する。その足掛かりとなるのは、マクダウェルとドレイファスの間で展開された論争である。彼らは知覚や行為に関する私たちの概念能力について論争をしたことで知られている。彼らの対立点である「概念的」であるという主張は「命題的」だという主張に解釈しなおすことができるだろう。このように解釈すると接続問題と論争の間には多くの共通点が見出されるが、その指摘は十分でない。本発表で試みるのは、これまでの「接続問題」をめぐる議論で十分に視野に含まれていなかった「知覚」の観点から、マクダウェルとドレイファス論争を参照しつつ新たなアプローチを考案することである。これまでは、意図から運動表象を経由して行為にいたるという一方向の因果関係のみが想定されてきた。本発表ではここに知覚の重要性を指摘することを通じて、接続問題への応答を試みる。

(参考文献)

Butterfill, Stephan A and Sinigaglia, Corrado (2014), "Intention and Motor Representation in Purposive Action," in *Philosophy and Phenomenological Research LXXXVII*, pp.119–145

Burnston, D. C. (2017), "Interface Problems in the Explanation of Action," in *Philosophical Explorations 20 (2)*, pp.242–258

Erik Rietveld (2010), "McDowell and Dreyfus on Unreflective Action," in *Inquiry, 53:2*, pp.183–207

飯嶋裕治「マクダウェル—ドレイファス論争における「概念能力」への問い—われわれは没入的対処において何に反応・応答しているのか？」(『哲学論文集』第五十三輯,九州大学哲学会,2017年,9月) 1–21頁